

松 山 大 学 論 集
第 29 卷 第 4 号 抜 刷
2 0 1 7 年 10 月 発 行

内子町の国際交流事業の成果と課題

久 保 理 恵 子

内子町の国際交流事業の成果と課題

久 保 理 恵 子*

第 1 章 国際交流事業の概観

第 1 節 自治体における国際交流事業

1 姉妹都市交流の現況

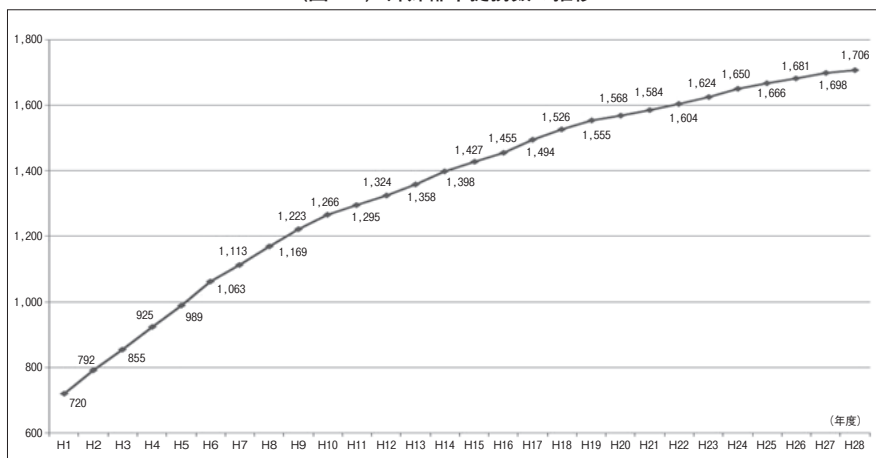
総務省によると、1998 年に 3,232 あった市町村は、平成の大合併を経て 2016 年 10 月 10 日現在、1,718 自治体となっている。一般財団法人自治体国際化協会（以下、CLAIR）によると、このうち海外の自治体と姉妹都市提携を結んでいる自治体は 2016 年 10 月 31 日現在で 868 自治体である。自治体が実施する国際交流事業は多種多様あるが、本論文では「自治体における国際交流事業」として「姉妹都市提携先との交流事業」を取り上げることとする。

なお、CLAIR は、次に掲げる要件のすべてに該当するときに「姉妹都市」として取り扱うこととしている。

- ① 両首長による提携書があること
- ② 交流分野が特定のものに限られていないこと
- ③ 交流するに当たって、何らかの予算措置が必要になるものと考えられることから、議会の承認を得ていること

* 内子町教育委員会 自治・学習課 主査

(図1-1) 姉妹都市提携数の推移



(出所) CLAIR ホームページより

(<http://www.clair.or.jp/j/exchange/shimai/index.html> 閲覧7月21日)。

我が国で初めての姉妹都市提携は、今から60年以上前の1955年に結ばれた長崎市とアメリカ・セントポール市の提携である。

前述のように自治体数は約20年前と比べてほぼ半減しているにも拘らず、姉妹都市提携数は年々増加しており、2016年度には1,700件を超えている。なおCLAIRが2017年1月に公表した「国際交流（姉妹都市交流事業等）に関する調査結果¹⁾」によると、姉妹都市を結んでいる自治体が2015年度に実施した事業件数は1,906件である。相手国、事業内容の分類については、表1-1のとおりである。

2 姉妹都市交流事業の特徴

表1-1を見ても分かるように、姉妹都市交流事業内容で多いのは青少年や教員の交流・生徒等の作品の交換などの教育分野、続いて職員や研修生の派遣・

1) 調査時期2016年10月、調査対象は海外の自治体と姉妹都市提携を締結している地方自治体868自治体。

(表 1-1) 相手国別の交流事業内容の割合

順位	国 名		教育	文化	スポーツ	医療	経済 (農業等)	経済 (工業等)	経済 (商業等)	行政	その他	合計
1	アメリカ	件数	287	43	11	3	1		5	65	65	480
		割合	59.8%	9.0%	2.3%	0.6%	0.2%	0.0%	1.0%	13.5%	13.5%	100.0%
2	中国	件数	100	47	26	8	5	3	27	171	38	425
		割合	23.5%	11.1%	6.1%	1.9%	1.2%	0.7%	6.4%	40.2%	8.9%	100.0%
3	韓国	件数	57	46	36		7	1	6	107	24	284
		割合	20.1%	16.2%	12.7%	0.0%	2.5%	0.4%	2.1%	37.7%	8.5%	100.0%
4	オーストラリア	件数	72	11	11		1		1	13	7	116
		割合	62.1%	9.5%	9.5%	0.0%	0.9%	0.0%	0.9%	11.2%	6.0%	100.0%
5	ロシア	件数	20	13	7	1			9	23	13	86
		割合	23.3%	15.1%	8.1%	1.2%	0.0%	0.0%	10.5%	26.7%	15.1%	100.0%
6	カナダ	件数	38	6	2					11	15	72
		割合	52.8%	8.3%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	15.3%	20.8%	100.0%
7	ドイツ	件数	25	10	8	1			1	18	7	70
		割合	35.7%	14.3%	11.4%	1.4%	0.0%	0.0%	1.4%	25.7%	10.0%	100.0%
8	ニュージーランド	件数	34						4	3	7	48
		割合	70.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	8.3%	6.3%	14.6%	100.0%
9	ブラジル	件数	16	5	1				3	14	3	42
		割合	38.1%	11.9%	2.4%	0.0%	0.0%	0.0%	7.1%	33.3%	7.1%	100.0%
10	フランス	件数	7	8	3				2	15	5	40
		割合	17.5%	20.0%	7.5%	0.0%	0.0%	0.0%	5.0%	37.5%	12.5%	100.0%
	その他	件数	71	35	17	3	8	3	4	72	30	243
		割合	29.2%	14.4%	7.0%	1.2%	3.3%	1.2%	1.6%	29.6%	12.3%	100.0%
	合計	件数	727	224	122	16	22	7	62	512	214	1,906
		割合	38.1%	11.8%	6.4%	0.8%	1.2%	0.4%	3.3%	26.9%	11.2%	100.0%

(出所) CLAIR「国際交流（姉妹都市交流事業等）に関する調査結果」2017年

受け入れや記念式典などの行政分野、そして音楽・芸能・芸術家等の派遣・受け入れなどの文化交流の3分野で、全体の約77%を占めている。また CLAIR が2006年度から総務省との共催により行っている自治体国際交流表彰（総務大臣賞）受賞事例28団体、審査委員会特別賞2団体、審査委員会奨励賞1団体の事例によると、ホームステイを中心とした青少年交流や教員交流、自治体

職員の派遣，またそれらを行政と民間が連携して行っていることなどが多くの事例に共通していた。

受賞団体の中には，次のような特徴的な事例もあった。

(1) 高山・デンバー友好協会（岐阜県） 2008 年度受賞

高山市とデンバー市（アメリカ）は，「歴史的伝統を有する山岳観光都市」であることなどの共通点から，1960年に姉妹都市提携が結ばれた。提携から約半世紀にわたり親善使節団の相互派遣，文化，スポーツ，教育等幅広い交流を市民により組織された高山・デンバー友好協会が主体となって行っている。この交流は人種や言葉の壁を越えて共に協力し交流を進めるという意識を市民に広げるものとなっており，このことは，高山市が国際観光都市として急増する外国人観光客を迎え入れる「おもてなしの心」の基礎となっている（外国人観光客数 2002年 48,449人，2007年 132,300人）。

市民主体の交流が定着し，半世紀にわたり継続していること，またこの交流が国際観光都市として，外国人観光客を迎え入れる市民の意識に結びついていることが評価された。

(2) 大分県竹田市 2011 年度受賞

炭酸泉を活用した温泉療養をまちづくりに生かすため，竹田市（旧直入町）視察団がその先進地バートクロツインゲン市（ドイツ）を1989年に訪問したことがきっかけで交流が始まった。中学生やコーラスグループの相互派遣等だけでなく，バートクロツインゲン市で製造されたドイツワインの限定販売，竹田市内でのホワイトアスパラガスの生産などの経済面にまで裾野が広がっている。また行政同士の姉妹都市盟約締結だけでなく両市の温泉施設が国際姉妹施設提携を結んでいる。東日本大震災の際には，バートクロツインゲン市が竹田市の音楽姉妹都市・仙台市のためにすばやく募金活動を開始。400万円を超える義援金が送られた。

直接被災していない自治体が、震災を契機にこれまで培ってきた交流基盤を基に被災地である国内姉妹都市と海外姉妹都市の橋渡し役を通して、自身の交流の広がりにも繋がった特徴的な事例で、海外の姉妹都市間と国内の友好提携が活かされた仕組みになった点やユニークな共通テーマ「温泉」を核に長年交流してきた点において評価された。

(3) 豊根村・サウジアラビア王国交流促進委員会(愛知県) 2014 年度受賞

2005 年愛・地球博(愛知万博)「一市町村一国フレンドシップ事業」で豊根村のフレンドシップ対象国がサウジアラビアに決定し、以来村民が交流促進委員会を組織して留学生の受け入れ、サウジアラビアン・フットサル国際親善カップへの出場、豊根中学校の在東京サウジアラビア大使館への訪問などを行っている。日本へのエネルギー供給において重要な位置づけとなっているサウジアラビアであるが、人と人との交流はその規模に比べて大変少ないと言われている。このような状況で、住民が主体となり地道な交流が続けられている。

サウジアラビア王国の国情を考えると、相互の自治体交流が難しいにも関わらず、愛知万博をきっかけとして、地道だが将来に繋がる活動をしっかりと続けている点、過疎の進む山村地域の小規模自治体で、村落再生・地域活性化の切り札として国際交流が大きな力を発揮していることが評価された。

第2節 自治体における国際交流事業の評価

自治体における国際化や姉妹都市交流事業の意義や役割については、先行研究として次のような意見がある。

片倉(2000)は、「自治体は、市民や住民への奉仕を主務とする公的機関であるが、その行事とか活動をとおして、地域の人びとをなにかと啓発する役割もまた担っている」とした上で、「いわゆる国際化に関しては、地域の人びとの意識を国際化するための政策の一つ、すなわち外国の都市・地域との姉妹都市・友好交流の提携を、自治体の重要な活動としてあげることができよう。こうし

た国際的活動は、通常「町おこし」「村おこし」のための一方策として立案し実施される場合が多いが、地域の人びとの意識を国際化するうえでもきわめて有意義な試みであると、積極的に評価することが可能である²⁾としている。

また川田（2011）は姉妹都市交流事業に関する実態調査を実施した上で、「姉妹都市交流事業では、交換留学生派遣，研修生の受け入れ，首長，議員，市民代表ら代表団の相互訪問，文化芸術交流など多様な交流が行われ，地域の国際化，住民と相手国住民との相互理解促進や国際意識の増進に大きな役割を果たしてきた」こと，今後地域のグローバル化や国際化が進むにつれ必要となる異文化間コミュニケーション能力の習得に関し「地方自治体も住民に可能な限り異文化と触れ合う環境や機会を提供し，地域全体の国際意識を高める施策を行っていく必要がある。そのためには，住民全体に何らかの形で平等にサービスを提供できる姉妹都市交流事業は有効な手段となるであろう」と述べている³⁾。

第2章 内子町における国際交流事業

第1節 ドイツ・ローテンブルク市との姉妹都市提携

1 交流の契機

(1) 「内子シンポジウム'86」

内子町はドイツのローテンブルク・オブ・デア・タウバー市⁴⁾と2001年より友好都市盟約，2011年より姉妹都市盟約を結んでいる。交流開始は1986年で，首長や議員などの公式訪問のほか，住民の相互訪問，内子町職員や住民の長期

2) 片倉穰（2000）「日本の自治体と東南アジア－姉妹都市・友好交流活動をめぐって－」桃山学院大学『国際文化論集』No.22。

3) 川田敏章（2011）「日本の地方自治体による姉妹都市交流事業の現状と課題について－異文化間コミュニケーションの視点から－」『愛知淑徳大学大学院論文集－グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科－』第3号。

4) 人口約11,000人，ドイツ南東部，ロマンティック街道と古城街道の交差点に位置する。中世の面影を残す街並みには年間200万人以上の観光客が訪れる。第二次世界大戦で建造物の40%以上が破壊されたが，失われた中世の姿を取り戻そうと，厳しい街並み保存の条例や人々の熱心な努力により旧市街地の復元を今日まで続けている。

研修、青少年海外派遣など様々な分野で、ホームステイなどを通じた草の根の交流が続けられている。ローテンブルク市は、ドイツ旅行の最も人気のあるルートであるロマンティック街道で一番の主要な観光地であり、中世の宝石箱と称される程の歴史的建造物が保存されたまちである。

内子町は、都会を目指すのではなく歴史・風土に培われてきた伝統や文化に価値を見出し、まちに誇りを持って人々が暮らすまちづくりを目指して、1970年代から町並み保存運動を開始した。しかし当時、長野県妻籠宿や岐阜県高山市などで取り組まれていた町並み保存は日本ではまだまだ歴史の浅い考え方であり、内子町においても町並み保存運動に批判的な意見が多かった。

このような状況の中、河内紘一町長⁵⁾(当時)は日本開発銀行高松支店長(当時)らとの懇談の際、支店長から町並み保存の先進地であるローテンブルク市の市長を招いたシンポジウム開催の提案を受け、町並み保存の推進を町民に理解してもらう良い機会が作れるのではないかと考えた。

開催の検討は総務課課長補佐(当時)の岡田文淑氏に指示され、岡田氏は早々に歴史的環境保全をテーマにした「歴史的環境シンポジウム」という素案を作成し、それを携え文化庁やシンクタンク、都市プランナーなどと協議を重ねた。

1986年1月には内子町役場内に岡田氏を班長とする7名のシンポジウム推進班が任命され、シンポジウムの準備が始められた。また、実施にあたって内子町の持つノウハウだけでは十分な対応が難しいことから、(財)日本地域開発センターに企画運営に関する助言を委託し、同センター企画調査部長(当時)の岡崎昌之氏、(株)ケイプランナーズの川端直志氏、広島大学工学部助教授(当時)の杉本俊多氏、総合研究開発機構参与(当時)の水島孝治氏からなる4名のアドバイザーグループを立ち上げた。併せて、小さな町が行うシンポジウムにしては高額な約1,000万円の予算を投じることも決められた。ローテンブルク市とのコンタクトはカール・デュイスベルグ協会日本事務所に依頼した。

5) 河内紘一は1979年より2009年、8期29年にわたって町長を務めた。

綿密な準備の末、ついに1986年10月23～24日の2日間、延べ9時間を超える「内子シンポジウム'86」が、その丁度1年前に復原工事の柿落としを終えたばかりの大正期の木造芝居小屋内子座で開催された。参加者は県内外から400名を超え、内子町においてはそれまでにない大規模なシンポジウムとなった。そしてこのシンポジウムで、オスカー・シューバルト（Oskar Schubert）ローテンブルク市長（当時）による「ローテンブルク・オブ・デア・タウバーと近代－共生の試み－」と題する講演が行われた。

シンポジウム実施に際し、市長夫妻を何処に泊めるかという議論があった。常識的には松山市内のウエスタンスタイルのホテルにといったところであるが、アドバイザーとの協議で河内町長宅という提案がなされた。河内町長宅は、築100年（当時）前後の旧庄屋の大きな邸宅である。このことは後にシューバルト市長夫妻に内子での滞在についての深い感動を与えることとなり、シューバルト夫妻が帰国した直後のローテンブルク市の地元紙で「市長、内子でもてなしの何たるかを知る」と報じられるなど内子町の存在をローテンブルク市に強く印象付けることになった。

（2）交流の継続と発展

シンポジウム終了直後、翌年ローテンブルク市へ表敬訪問をしようという提案がなされ、1987年6月に河内町長を団長とする13名の訪問団がローテンブルク市を訪れた。一行はシューバルト市長自らによる市内の案内など歓待を受け、河内町長は内子での滞在のお返しとしてシューバルト市長の自宅に招待され、市長夫人も交えて夕食を共にする機会を得た。

当時、日本の中でもローテンブルク市との交流を持ちたいと希望する自治体や地域はいくつか存在していた。しかし、そのほとんどがローテンブルク市に対して「すぐに訪問します」と言うもののなかなか実現には至らないのが実情であった。そのような中でローテンブルク市は、内子町が他の自治体や地域と違い、直ちに有言実行したことを高く評価した。

ローテンブルク市との交流のきっかけは、関係者の懇談の場での話からと何気ないものであり、最初からローテンブルク市との交流を意識したものでは無かった。シンポジウムの実施ということを真摯に受け止めて、内子町のまちづくりに生かそうと当時の関係者が努力したことにより交流の芽が生まれたのである。

2 「内子国際交流シンポジウム'93」の開催と国際交流協会の設立

こうしたローテンブルク市との相互交流を行う中で、国際交流の必要性や重要性が少しずつではあるが町民に芽生えはじめ、1993年に「地方の国際化とは何か」をテーマにした「内子国際交流シンポジウム'93」が開催された。パネルディスカッションではコーディネーターは日本地域開発センター企画調査部長（当時）の岡崎昌之氏、パネリストを愛媛県国際交流センター所長（当時）の竹本孝氏、日本開発銀行営業第四部長（当時）の瀧口勝行氏、神戸学院大学客員教授（当時）のカロリン・フンク⁶⁾（Carolyn Funk）氏、南郷村企画観光課長（当時）の原田須美雄氏、「石川のたまご」主宰（当時）の早川芳子氏、元青年海外協力隊員（当時）の池田洋助氏の6名が務めた。それぞれの立場から活発な意見が出され、今後内子町が国際交流を念頭においたまちづくりをしていくために、町民が主体となり継続的に行うこと、観光や町並み保存などの内子町ならではのテーマに絡めた分野での活動を行うこと、また町民自身が「内子でがんばる、内子に徹する」気持ちを持つことが大切であるとの提言があった。

このシンポジウムをきっかけに「町民が主役となる国際交流活動の母体となる協会を作ろう」という気運が高まり、翌年に財団法人内子町国際交流協会が設立された。財団法人としての設立は愛媛県内で3番目、町では初めてのことであった。

6) ドイツ・フライブルク市出身。現広島大学総合科学部教授。観光地理学専門。

設立にあたっては、「町民が主役、多くの町民に参加してもらいたい」という町民有志や役場職員で組織したプロジェクトメンバーたちの意向があり、作成したパンフレットを手に、活動に必要な資金を5年間で1億円集めようと目標を立て、一口3,000円を目安に町民一人ひとりに説明して回って募った。その結果、町内の184事業所（建設業、商業、工業部会など）、1,500を超える個人および8団体から約1億円の資金が寄せられた。このような町民の熱意を受け、町（行政）も町民から集まった額と同額の1億円を当時の国の施策「ふるさと創生事業」を財源として出捐し、合計2億円の基金を創設して国債を買い付け、その利息を主な財源として運営を始めた。

国際交流協会は、「国際化社会とは」「国際交流とはどういうことか、どうあるべきか」を町民自身が考え、共通理解を図りながら、各種の国際交流事業を広範囲に、また積極的に推進・展開していくための交流組織として活動している。協会設立以降、町は協会運営・活動をサポートしながら、連携して様々な国際交流事業に取り組んでいる。

3 姉妹都市提携へ

協会設立以降は協会と町が連携してローテンブルク市との相互交流に組み、住民同士の着実な交流を積み重ねてきた。このような中、2001年に友好都市提携を結ぶこととなった。2005年には協会設立10周年を記念して、ローテンブルク市にて「内子フェア」を開催した。内子町内外から86名がローテンブルク市を訪問し、それぞれの特技や趣味を生かして伊予万歳や剣詩舞・書道などの日本文化を紹介したり、水墨画や剣道・風作りなどの日本文化ワークショップを行ったりした。また友好都市盟約から10年が経った2011年、姉妹都市提携を結ぶこととなり、これを記念してローテンブルク市にて内子町との交流の歩みや海外派遣生たちからのメッセージ、内子町のまちづくりや工芸品の紹介展示などを行った。

第2節 姉妹都市交流事業

1 青少年海外派遣事業

(1) 事業内容

町と協会が共催で、ローテンブルク市等への青少年海外派遣事業を実施している。国際的視野を有する人材を育成し、町の地域活性化や、諸外国との友好親善・相互理解・国際協力に寄与することを目的として、内子町の将来を担う青少年（中学生・高校生）を派遣している。現地では「生きた学び」を得られるよう、ホームステイを通じた日常生活体験、町並み保存や環境保全の学習、学校訪問による現地の青少年との交流、警察署や消防署・博物館見学、工房体験などの多彩な体験・交流活動を行う。特に町並み保存は両市町の共通テーマであることから、事前研修において町の町並み保存事業について学習し、現地でローテンブルク市での政策や課題を学ぶ。また、広く世界を見聞し多様な価値観に触れることで、より豊かな国際感覚を身に付けることを目的に、第2訪問地としてローテンブルク市とは異なる歴史や文化を持つ都市を訪れる。第2訪問地は、協会事業の企画・運営を行うボランティアスタッフ・プランナーと相談しながら、学ぶ目的や世界情勢などに応じて決定する。これまでに訪れた第2訪問地は、ヨーロッパを中心に13カ国18都市に及ぶ（表2-1参照）。

(表2-1) 青少年海外派遣事業 現在までの派遣先と主な内容

	日 程		ローテンブルクでの主な研修内容	その他の訪問地	主な研修内容
第1回	1995年11月8日(木) ～11月17日(金)	12名	市内見学、ギムナジウム訪問、アンスパッハへ遠足、青少年センターの青少年達との夕食会	スイス・ジュネーブ オーストリア・ウィーン	赤十字国際博物館、国連、ウィーン日本人学校訪問、ファームステイ、オペラ座(バレー鑑賞) 他
第2回	1996年11月3日(日) ～11月12日(火)	15名	市内見学、ギムナジウム訪問、ヴァイカースハイムへ遠足、ホストファミリーとの夕食会	オーストリア・ウィーン フランス・パリ	オペラ座(バレー鑑賞)、日本人学校訪問、ドナウショッピングセンターのゴミ処理施設見学、ファームステイ、ルーブル美術館、ノートルダム寺院 他
第3回	1997年11月1日(土) ～11月10日(月)	14名	市内見学、ギムナジウム訪問、ヴェルツブルクへ遠足、ホストファミリーとの夕食会	オーストリア・ウィーン フランス・パリ	オペラ座(バレー鑑賞)、日本人学校訪問、リサイクル施設の見学、ファームステイ、ルーブル美術館、ノートルダム寺院 他

第4回	1998年7月25日(土) ～8月3日(月)	14名	市内見学, ギムナジウム訪問 (スポーツ交流), アンスバッハへ遠足, ホストファミリーとの夕食会	ドイツ・ハイデルベルグ イギリス・ロンドン	ハイデルベルグの環境保護施設見学, フェルクリンゲン製鉄所跡見学, 大英博物館, ウィンザー城見学 他
第5回	1999年11月15日(月) ～11月24日(水)	14名	市内見学, ギムナジウム訪問, 露天農地博物館見学, 青少年との交流, ホストファミリーとの夕食会	ドイツ・ミュンヘン スイス・ジュネーブ フランス・パリ	ダッハウ収容所見学, BMW博物館, インターナショナルスクール訪問, 国連, オルセー美術館, ユネスコ本部見学 他
第6回	2000年10月7日(土) ～10月16日(月)	12名	市内見学, ルイトボルト小学校訪問, 老人ホーム訪問, 買い物ツアー, ホストファミリーとの夕食会	ドイツ・ミュンヘン フランス・パリ	BMW博物館, ニンフェンベルク城見学, ベルサイユ宮殿, ルーブル美術館, パリ日本人学校訪問 他
第7回	2001年12月10日(月) ～12月19日(水)	14名	市内見学, ギムナジウム訪問, 幼稚園訪問, クリスマスマーケット見学, 自由行動, 買い物ツアー, ホストファミリーとの夕食会	フランス・パリ	ノートルダム寺院, ルーブル美術館 他
第8回	2002年11月11日(月) ～11月20日(水)	13名	市内見学, 職業専門学校訪問, ヴュルツブルクへ遠足, 青少年との交流会, ホストファミリーとの夕食会	フランス・パリ	ノートルダム寺院, ルーブル美術館 他
第9回	2003年11月29日(土) ～12月8日(月)	13名	市内見学, ギムナジウム訪問, 交流会, クリスマスマーケット見学, リサイクル施設見学, ゴミ処理に伴う発熱利用施設見学	イタリア・ローマ	サンピエトロ寺院, コロッセオ, スパイン広場 他
第10回	2004年12月2日(水) ～12月11日(土)	12名	市内見学, ギムナジウム訪問, 交流会, クリスマスマーケット見学, ゴミ処理施設見学, パン屋さんでクリスマススクッキー作り体験	チェコ・プラハ	ブラハ城見学, 旧市街の見学 他
第11回	2005年10月20日(水) ～10月29日(土)	14名	市内見学, ギムナジウム訪問, 交流会, 車と技術の博物館見学, 自然散策, ハイデルベルク, ヴュルツブルクへ遠足	オーストリア・ウィーン	シェーンブルン宮殿見学, インターナショナルスクールの生徒との交流 他
第12回	2006年10月18日(水) ～10月27日(金)	14名	市内見学, ギムナジウム訪問, 交流会, 環境政策の講義, 下水処理場見学, 農場見学, ヴュルツブルクへ遠足	ドイツ国内 (ドレスデン・ベルリン)	ドレスデン世界遺産見学, ベルリン市内見学, シュプレー川の観光船 他
第13回	2007年11月13日(水) ～11月22日(土)	14名	市内見学, ギムナジウム訪問, 交流会, ゴミ処理場, 下水処理場見学, クリスマススクッキー作り, ニュルンベルクへの遠足	オランダ・アムステルダム	運河クルーズ体験, ゴッホ美術館, 国立美術館, 世界遺産「風車」見学, チーズ作り体験
第14回	2008年12月9日(水) ～12月18日(水)	12名	市内見学, ギムナジウム訪問, 交流会, ゴミ処理場, 浄水場見学, ヴュルツブルク遠足, クリスマススクッキー作り, ニュルンベルク遠足	ポルトガル・リスボン, シントラ	リスボン市内観光, 世界遺産「シントラの文化的景観」の見学
第15回	2009年12月7日(月) ～12月16日(水)	12名	市内見学, ギムナジウム訪問, 交流会, 下水場見学, ソーラーパネル見学, バイオガス施設見学, クリスマススクッキー作り, ハイデルベルクのクリスマスマーケット	ドイツ国内 (ベルリン)	ベルリン市内観光, DDR博物館, 壁博物館他, 国会議事堂見学, 地下鉄体験
第16回	2010年10月18日(月) ～10月28日(水)	12名	市内見学, ギムナジウム訪問, 交流会, プレッツェル作り, ロウソク立て工房見学, スーパーの見学, 消防署・警察署見学, お城見学と鷹のショー	ベルギー・ブリュッセル	ブリュッセル市内研修 (EU本部, 市庁舎, 旧市街地, 王立美術館等見学), チョコレート作り体験

第17回	2011年12月11日(日) ～12月21日(水)	13名	市内見学、ギムナジウム訪問、交流会、幼稚園訪問、特別支援学校訪問、クリスマススクッキー作り、警察署見学、車と技術の博物館見学、クリスマス博物館・マーケット見学、折り紙交流	イギリス・ロンドン	ロンドン市内研修（バッキンガム宮殿、ウェストミンスター寺院等見学）、ウィンザー城見学、地下鉄体験
第18回	2012年11月14日(水) ～11月23日(金)	13名	市内見学、ギムナジウム訪問、交流会、プレッツェル作り、特別支援学校訪問、警察署見学、中世期博物館見学、スーパーで買い物体験、クリスマス博物館見学、ミュンヘン遠足	イタリア・ローマ バチカン市国	歴史的建造物研修（ヴァチカン美術館、システリーナ礼拝堂、サンピエトロ寺院、コロッセオ、フォロロマーノ、パンテオン、トレビの泉、スペイン広場）、ピザ作り体験
第19回	2013年11月12日(火) ～11月21日(水)	12名	市内見学、音楽学校訪問、交流会、プレッツェル作り、特別支援学校訪問、警察署見学、ライク杜工房見学、スーパーで買い物体験、鋳造工房見学、ヴェルツブルク遠足	スペイン・バルセロナ	バルセロナ市内研修（グエル公園、カサ・バトリヨ、カサ・ミラ、カンブ・ノウスタジアム見学、サグラダ・ファミリア、サンジョセップ市場見学）、フラメンコ見学
第20回	2014年10月27日(月) ～11月 5日(水)	13名	市内見学、町並み保存についての講義、交流会、特別支援学校訪問、警察署見学、プレッツェル作り、アスレチック体験、スーパーで買い物体験、鋳造工房見学、ヴェルツブルク遠足	フィンランド・ヘルシンキ	オラリ中学校高等学校訪問、ヘルシンキ市内研修（ヘルシンキ大聖堂、ウスペンスキ寺院、テンペリアウキオ教会、トラム体験）、世界遺産オスメンリナ要塞見学
第21回	2015年10月26日(月) ～11月 4日(水)	13名	市内見学、町並み保存についての講義、交流会、オーバーシェッケンバッハ小学校・特別支援学校訪問、警察署見学、プレッツェル作り、スーパーで買い物体験、クリスマス博物館見学、鋳造工房見学、シュタイフ見学	イギリス・エディンバラ	エディンバラ市内研修（エディンバラ城、スコットランド博物館、ホリールード宮殿、ピープルズ・ストーリー）、現地大学生と市内自主研修
第22回	2016年10月31日(月) ～11月 9日(水)	14名	市内見学、町並み保存についての講義、交流会、Fablab 工房見学・体験、警察署見学、クリスマス博物館見学、スーパーでの買い物体験、クリスマススクッキー作り、鋳造工房見学、ヴェルツブルク遠足	フィンランド・ヘルシンキ	オラリ中学校高等学校訪問、ヘルシンキ市内研修（テンペリアウキオ教会、トラム体験）

協会設立翌年の1995年より毎年10数名を派遣しており、2017年度で23回を数え、派遣生は300名を超える。これは町民の1.7%が派遣を経験したことになる。

(2) 派遣事業と人材育成

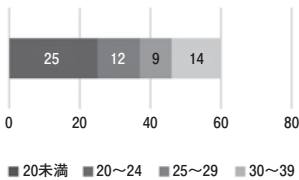
派遣生の現在を辿ると、町内で英語教員として勤務している人、旅行会社に就職して世界を仕事場としている人、協会プランナー(ボランティアスタッフ)として活動している人、大学で国際文化や英文学を専門に学んだりドイツ留学

したりする人などがおり、派遣事業は確実に彼らに大きな影響を与えている。町内外を問わずそれぞれの分野で活躍する彼らの姿は23年間継続している本事業の最大の成果ともいえるであろう。

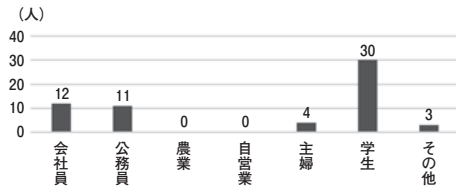
派遣生の現在、また事業実施の効果等を探るため、2017年3～4月にかけて派遣生全員へアンケート調査を行った。その結果、61名（男性22名、女性38名、1名無回答）が回答した。回答結果について以下のようにまとめた。

派遣生自身が考える派遣前後の変化については、表2-4のような結果になった。その他として、「いろんな世界がありいろんな人がいると考え方の幅が広

(表2-2) 回答者の年齢
(N=61)

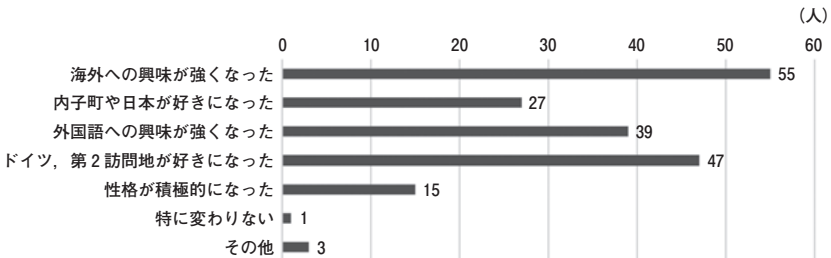


(表2-3) 現在の職業等



(出所) 内子町教育委員会, (公財) 内子町国際交流協会実施アンケート「内子町青少年海外派遣事業について」

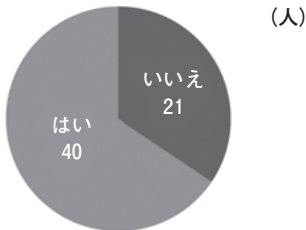
(表2-4) 派遣前と後でどのような変化があったか (複数回答可)



(出所) 同上。

がり、海外に行ったことで、やればできると自信が付いた」「今の生活が尊く貴重なものだと思えるようになった」「派遣前に訪問国や日本文化などをあまり調べておらず、現地で取り組みの甘さを痛感した経験はその後の自分の人生の良い教訓になった」という意見があった。

(表 2-5) 進学・就職を決める際、または現在の生活に、派遣に参加した経験が少しでも影響したか



進学・就職、または現在の生活に派遣経験が少しでも影響したかの問いについては、約3分の2が「はい」と答えており、以下のような回答があった。

ア 外国語学習・国際社会に対する関心

- ・外国語の勉強をするきっかけになった。また外国人との交流を通じて、改めて日本文化についても知る機会となり、さらに勉強するきっかけになった。
- ・自分の英語力のなさを痛感し、英語を学ぶにあたって強く影響した。
- ・海外に興味が強くなり、海外一人旅をした。
- ・外国語習得への興味をもち続けている。
- ・海外留学をするきっかけになった。

イ 進路・就職への影響

- ・外国文化に興味を持ち、大学で外国語や外国文化を学ぶきっかけになった。
- ・異文化と観光ホスピタリティに興味をもち、国際的な大学に入学した。
- ・就職時、グローバル事業を行っている企業を志望。
- ・就職活動で中学時代について尋ねられエピソードとして話した。
- ・海外に行った経験は、面接で自分の強みとなってくれた。

- ・ 高校生のときに英語劇や英語スピーチに挑戦。大学でも外国語を専攻。現在は英語教員として勤務している。
- ・ 環境工学を専攻し、街づくりをする仕事に就いた。
- ・ 貴重な体験をさせてくれた内子町に恩返しをしたいと思い、内子町役場に就職した。

ウ その他

- ・ 内子に残り、働きたいという気持ちが強くなった。現在も内子に居住している。
- ・ 将来、内子町の事業に積極的に参加していきたい。
- ・ 自分自身の経験から、自分の子どもたちにも子どもの間に海外経験をさせたい。
- ・ 外国人に対する苦手意識がなくなり積極的に関われるようになった。
- ・ 広い視野で物事を見たいと思った。
- ・ 世界の事に興味をもって世界史を勉強している。
- ・ 自分に自信を持たせてくれた。

派遣生は海外での様々な体験や経験を通して、国際理解を深め、世界的な視野で物事を理解し行動できる力を身につけている。派遣生の多くは、帰国後海外に目を向けるようになっただけでなく、「日本の文化や内子の町を好きになり誇れるようになった」「内子に生まれてよかった」と自分の国や町を見つめ直したり、自分自身と向き合ったりと世界を知ること新たな気持ちで世の中と向き合えるようになっていくことが分かる。人材育成を目的とした本事業は、着実に青少年や内子のまちづくりに大きな影響を与えている。今後も継続して行うべき事業であると共に、派遣生との継続的な繋がりを強化していく必要がある。

2 職員及び町民の国際研修と国際交流

(1) 職員研修

1994年には町並み保存を学ぶため町職員1名（1年間）、2003年には環境保全政策等を学ぶため町職員1名（1年1ヶ月）がローテンブルク市で学んだ。町並み保存を学んだ職員は町並み保存センターにて長年町並み保存を核としたまちづくりに従事したのち、現在は景観保全に関わる業務に携わっている。また環境保全政策等を学んだ職員は現在環境政策室に所属し、環境に配慮した政策作成等の業務に携わっているほか、経験を生かして協会事業にも参画している。それぞれがローテンブルク市での経験を内子町のまちづくりに生かしている。

(2) 技術研修（ハム・ソーセージ職人）

1994年、ハム・ソーセージ職人を目指す青年（3年半）がローテンブルク市の肉屋で研修を開始した。ハム・ソーセージ職人となった青年は、現在道の駅「内子フレッシュパークからり」に在籍。内子豚などを使って本場の味を提供し、内子の名物のひとつとして大変好評を得ている。また数年前、町並み保存地区の空き家にドイツ料理店がオープンし、その店の目玉メニューとして青年の加工品を使った料理が提供されている。本格的なドイツ料理店は西日本でも珍しく、大変人気の店となっている。2011年の姉妹都市盟約の際には、ローテンブルク市にて「里帰り試食会」を開催。職人として活躍する姿を市民に見ていただくことができ、研修時代の恩返しの時間となった。

(3) 町民主体の文化交流への発展

2011年、ローテンブルク市での姉妹都市提携調印式の公式訪問に、内子手しごとの会や町内の手工芸職人等も同行し、内子町のまちづくりや風物、現代の暮らしに伝統的な技術を取り入れた工芸品等のPR展示を行った。この訪問が契機となり、2013年5月には内子手しごとの会を中心とした訪問団9名が

協会の助成事業を活用してローテンプルク市を自主訪問、工芸品等の展示即売会や和紙を使ったワークショップなどを開催し、大変好評を得た。内子手しごとの会は2015年にも同じく協会の助成事業を活用してローテンプルク市を再訪問、現地の学校にて折り紙や手すき和紙体験などの日本文化ワークショップを行ったり、ローテンプルク市の祭り「聖霊降臨祭」に参加したりした。内子手しごとの会の事例は行政主導から始まった交流がきっかけとなって少しずつ意識が変化し、町民主体の文化交流へと繋がった特徴的なものである。今後彼らだけでなく様々な分野で大人の交流が広がることが期待される。

(4) 訪問団の受け入れ

町民・市民の相互交流についても、町と協会が連携して取り組んでいる。両市町の交流理念は「Face to Face」で、町や市単位だけでなく、町民や市民同士の交流を大事にすること。例えばローテンプルク市民の内子町来町の際には、その理念を念頭において協会事業の企画・運営を行うボランティアスタッフ・プランナー（以下、協会プランナー）と協会事務局、そして町の国際交流担当課が一緒にプログラムを企画する。その際、町民の方が先生となって手打ちうどん体験や着物の着付け体験、内子町の伝統産業である手すき和紙体験などの日本や内子の文化体験を通して町民・市民同士が交流できるプログラムを企画している。また協会のイベント・ホームステイ・文化などのボランティアを活用することで町民が気軽に国際交流できる機会にもなっている。

直近では、「出会いから30年、姉妹都市盟約締結5周年」を記念して2016年3月にローテンプルク市から市長を始め総勢31名の訪問団が来町した。今回は餅つき体験や小学校訪問のほか、スポーツを通じた青少年同士の交流も行った。また5月には内子町から町長や議会関係者、町民代表、協会プランナーなど18名がローテンプルク市を訪問し、公式訪問行事や聖霊降臨祭などに来賓として参加した。また、今後青少年だけでなく大人の交流にも力を入れることを視野に入れ、小学校における外国語教育の現状や、世界的に有名な観光

都市の観光施策、また町並み保存・景観保全などに関する都市計画について重点的に学びながら市民と交流を図ることができた。

(表 2-6) 内子町・ローテンブルク市 交流の系譜

1986 年（昭和 61 年）～2017 年（平成 29 年）

年	月	ローテンブルク市民が内子町来町	内子町民がローテンブルク市訪問
1986 昭61	10	町並み保存とまちづくりをテーマに開催した内子シンポジウム'86（内子座） オスカー・シューバルト市長ご夫妻を招聘	
1987 昭62	6		河内町長、町民有志がローテンブルク市を訪問
1988 昭63	11	ヘルベルト・ハッハテル市長及びシューバルト前市長が内子町訪問	
1993 平5	9		河内町長・町議会議員が、ローテンブルク市を公式訪問（21名）
1994 平6	5		内子町役場職員 1 名をローテンブルク市庁に派遣（1 年）、青年 1 名をハム・ソーセージづくりの研修で派遣（3 年半）
1994 年（平成 6 年）10 月 財団法人内子町国際交流協会設立			
1995 平7	7		町民有志使節団がローテンブルク市を訪問（25名）
	11		第 1 回青少年海外派遣団訪問 （14 名：青少年 12 引率 2）
1996 平8	11		第 2 回青少年海外派遣団訪問 （17 名：青少年 15 引率 2）
1997 平9	4	ハッハテル市長及び市民が内子町を訪問（17 名）	
	11		第 3 回青少年海外派遣団訪問 （16 名：青少年 14 引率 2）
1998 平10	7		第 4 回青少年海外派遣団訪問 （17 名：青少年 14 引率 3）
	11		町民海外派遣団がローテンブルク市を訪問（13 名） 河内町長訪問
1999 平11	11		第 5 回青少年海外派遣団訪問 （16 名：青少年 14 引率 2）

2000 平12	10		第6回青少年海外派遣団訪問 (15名：青少年12 引率3)
2001 平13	3	ハッハテル市長及び市民が内子町を訪問 (29名)	
	9		河内町長・町議会議員が、ローテンブルク市を公式訪問(15名) 《友好都市盟約の締結》
	12		第7回青少年海外派遣団訪問 (17名：青少年14 引率3)
2002 平14	4	ローテンブルク市青少年等内子町訪問 (15名：大人4 青少年11)	
	11		第8回青少年海外派遣団訪問 (16名：青少年13 引率3)
2003 平15	4	ローテンブルク市青少年等内子町訪問 (19名：大人7 青少年12)	
	5		内子町役場職員1名が、1年間ローテンブルク市において志願研修(語学研修, 市庁研修等)
	12		第9回青少年海外派遣団訪問 (16名：青少年13 引率3)
2004 平16	4	ローテンブルク市青少年等内子町訪問 (14名：大人8 青少年6)	
	12		第10回青少年海外派遣団訪問 (15名：青少年12 引率3)
2005年(平成17年) 1月 3町合併			
2005 平17	4	ハッハテル市長及び市民、ローテンブルク市の姉妹都市であるフランス・アティスモン市民が内子町を訪問(25名)	
	6		財団法人内子町国際交流協会設立10周年記念事業として、ローテンブルク市において「内子フェア」開催・河内町長訪問(86名)
	10		第11回青少年海外派遣団訪問 (17名：青少年14 引率3)
2006 平18	10		第12回青少年海外派遣団訪問 (17名：青少年14 引率3)
2007 平19	4	ローテンブルク市青少年等内子町訪問・ハルトル市長ご夫妻初来町 (15名：大人9 青少年6)	

	11		第13回青少年海外派遣団訪問 (17名：青少年14 引率3)
2008 平20	12		第14回青少年海外派遣団訪問 (15名：青少年12 引率3)
2009 平21	12		第15回青少年海外派遣団訪問 (15名：青少年12 引率3)
2010 平22	4	ローテンブルク市青少年等内子町訪問・ ハルトル市長ご夫妻来町 (20名：大人15 青少年5)	
	10		第16回青少年海外派遣団訪問 (15名：青少年12 引率3)
2011 平23	9		姉妹都市盟約締結記念式典開催に係るロー テンブルク市訪問・稲本町長訪問 (18名)
	10	姉妹都市盟約締結記念式典開催に係る内子 町訪問・ハルトル市長ご夫妻来町 (12名)	
	12		第17回青少年海外派遣団訪問 (16名：青少年13 引率3)
2012 平24	10	ローテンブルク市青少年等内子町訪問・ 第3市長ご夫妻来町 (9名：大人3 青少年6)	
	11		第18回青少年海外派遣団訪問 (16名：青少年13 引率3)
2013 平25	10	ローテンブルク市訪問団内子町訪問 (9名：全員大人)	
	11		第19回青少年海外派遣団訪問 (15名：青少年12 引率3)
2014 平26	4	ローテンブルク市訪問団内子町訪問・ハル トル市長ご夫妻来町 (10名：全員大人)	
	10		第20回青少年海外派遣団訪問 (16名：青少年13 引率3)
2015 平27	7	ローテンブルク市訪問団内子町訪問第2市 長ご夫妻、第3市長ご夫妻来町 (4名)	
	10		第21回青少年海外派遣団訪問 (16名：青少年13 引率3)
2016 平28	3	ローテンブルク市青少年等内子町訪問・ ハルトル市長ご夫妻来町 (31名：大人22 青少年9)	

	5		内子町・ローテンブルク市 姉妹都市盟約締結5周年記念事業に係るローテンブルク市訪問・稲本町長訪問 (18名)
	10		第22回青少年海外派遣団訪問 (17名：青少年14 引率3)
2017 平29	10	ローテンブルク市訪問団内子町訪問・第3市長ご夫妻来町予定 (22名：全員大人)	
	11		第23回青少年海外派遣団訪問予定 (15名：青少年12 引率3)

第3章 内子町の国際交流の今後の課題

第1節 内子町における国際交流事業の特徴と評価

ー自治体国際交流表彰（総務大臣賞）等における評価からー

2017年、内子町は自治体国際交流表彰（総務大臣賞）を受賞した。本賞は、CLAIRと総務省との共催により、地域の国際化の更なる推進を図るため、姉妹都市自治体国際交流等の国際交流について、創意と工夫に富んだ取り組みを表彰し広く全国に紹介する事業である。2017年4月、第11回の受賞団体が発表され、35の応募団体から内子町を含む3団体が受賞した。内子町は30年以上に亘るローテンブルク市との相互交流について表彰を受け、内子町の受賞について、審査委員会は次のような評価ポイントを示している。

- 町並み保全、景観保全、暮らしやすいまちづくりという共通の目的を持って交流しており、理念が明確。小さい町が地道に相互交流を重ね、取り組みを拡大してきたこと。
- 青少年派遣事業は町民の1.7%が経験し、その後の進路に影響を与えているなど、人材育成としての成果もみられる。
- ハム職人による内子ならではの味の提供、ドイツフェスタの開催などは、新しい産業の創出につながる。

○ローテンブルク市との交流を通して、町民が国際交流の重要性に気づき、町民・事業所の寄付で国際交流協会が設立されたことは大きな財産である。企画・運営はボランティア・プランナーが担うという仕組みは、市民主体の交流が展開されていることの証である。

内子町はこれまでも国際交流に関する表彰として、1999年度に「世界に開かれたまち自治大臣表彰」（旧内子町）、2014年度に「文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）」を受賞しており、自治体国際交流表彰（総務大臣賞）はそれに続く受賞となった。

自治体国際交流表彰の受賞評価ポイントにも上げられているが、内子町の国際交流事業は、ローテンブルク市との交流開始をきっかけに地道な交流を少しずつ積み重ね、現在に至っている。特に内子町国際交流協会は、ローテンブルク市との交流をきっかけに国際交流の必要性や重要性が町民の中に芽生え、行動を起こしたからこそ設立され、現在はその協会と町が連携して事業を行っている。また「町並み保存」というローテンブルク市との共通のテーマを持ちながら人材育成を理念に地道な相互交流を重ね取り組みを拡大してきた。

文化庁長官表彰では、歴史的景観保全の世界的な先進都市であるローテンブルク市と姉妹都市になり、その相互交流を生かしながら歴史や文化を大切にし、歴史的な町並み、さらには村並みや山並みに至るまで、景観を生かしたまちづくりを進めていることが評価されている⁷⁾。

これらのポイントは、内子町の特徴的な取り組みであり、今後もぶれずに継続していくことが重要である。また今後はさらに町民を巻き込み、町並み保存・景観保全を共通テーマとした交流を推進していく必要がある。

7) 文化芸術の持つ創造性を地域振興、観光・産業振興等に領域横断的に活用し、地域の特色を生かした文化芸術活動や社会課題の解決に、行政と住民との協働、行政と企業や大学との協力等により取り組み、特に顕著な成果をあげている市区町村に対し、文化庁長官が表彰する。

第2節 まちづくりにおける効果と課題

今後の内子町における国際交流の在り方については、2014年11月29日、内子座において開かれた協会設立20周年記念シンポジウムでの「内子町の国際交流～今後に向けての展望～」をテーマに行われたパルディスカッションの中で、一つの提言がなされた。コーディネーターは「国際交流シンポジウム'93」と同じく法政大学現代福祉学部・大学院人間社会研究科の岡崎昌之教授（当時）、パネリストは青少年海外派遣OB・二上雅史氏、協会プランナー・大野千景氏、稲本隆壽町長、内子町国際交流員ドレーン・アルント（Doreen Arndt）氏、そして国際経済フォーラム代表・瀧口勝行氏が務めた。

パネルディスカッションでは、ローテンブルク市との交流が積極的に継続されている理由について、「交流の主体が町民レベルで積極的に行われていること」、「交流に共通の哲学（コア）＝町並み保存があること」が挙げられた。また、「青少年海外派遣事業で250人以上を派遣し、青少年に広い視野を与え様々な活動の土壌になっているが、成果が表れるには長い時間とエネルギーが必要であり、ぶれずに継続的に歩みを進めていくことが大切である」との意見が出た。さらに、交流とは人間同士の繋がりであり、ゴールもおしまいもないことから、「交流は創造を生む」という信念を持ち続け、今後の交流の中で両市町にキーパーソンやその後継者を作り続けることがとても重要であるとの提言を受けた。

第3節 町民一人ひとりが主役の国際交流を目指して

内子町は当初から人材育成を目的として国際交流事業を進めてきた。自治体国際交流表彰（総務大臣賞）をはじめとした各賞の受賞は、内子町の地道な国際交流事業が自治体の果たす役割として評価されたということであり、今後もぶれずに交流の歩みを進めていくための励みとなっている。

内子町とローテンブルク市の姉妹都市交流は、定期的な住民レベルでの「Face to Face」の交流こそが両市町が目指す交流の形である。今後も行政と協

会が連携して「まちづくりは人づくり」の観点から町民が主体となったローテンブルク市との交流を軸にした地道な国際交流を続けていきたい。とりわけ、今後の交流の担い手となる青少年同士の交流を継続すると共に、前節でも触れたように共通テーマである「町並み保存」分野や大人への交流推進など交流の裾野を広げることで、交流の新たなキーパーソンが生まれる可能性も期待したい。今後もより多くの町民が気軽に参加し主体的に活動できる機会を作っていきたい。

参 考 文 献

総務省・CLAIR 共催「自治体国際交流表彰（総務大臣表彰）」事例
内子シンポジウム'86 報告集「まちを活かす」
国際交流シンポジウム'93 報告書
内子町国際交流協会設立 20 周年記念誌